

何が臨床教育学なのか

皆 藤 章

臨床教育学講座は、臨床教育学と教育人間学というふたつの学問領域の知を「人間の生」の地平に創造的・実的に展開させていく試みを続けてきている。本紀要もそうした試みのなかに位置づけることができる。

わたしが昨今痛感していることは、人間の生を探究する諸学問領域が細分化されたそれぞれの専門性に閉鎖的になるのではなく、諸学問領域がそれぞれの専門性を有しつつも、他の学問領域にも開かれたスタンスをとることの重要性である。現代という時代は、総合的に人間の生を探究していくことが求められているのではないだろうか。多くの学問領域の出逢いによる緊張感を抱きつつ、それをとおして生成されていく知がふたたび人間の営みに環流されていく。そのような循環に本講座は生きているように、わたしには思われる。

とりわけ、臨床教育学にはそうした性質が濃厚であろう。きわめて若いこの学問は、基盤とするパラダイムを科学に置こうとはしていない。少なくともわたしはそうである。そしてここ数年、臨床教育学における方法論を人間の体験という視角から築いていこうとする試みが続けられてきた。この場合、「臨床教育学とは何か」という問いを立てるのではなく、「何が臨床教育学なのか」という問いを立てることが重要である。学問のフレームが既知のものとしてすでにあるのではなく、体験が学問のフレームを形作っていく、そのような方向性が模索されてきた。このことは、「人間とは何か」という問いではなく「何が人間なのか」という問いを問い続けることでもある。

このような試みは少しずつではあるが、成果を見せ始めているようにわたしには思われる。新しい学問が生まれてくることにコミットすることの苦勞と、それを遥かに凌駕する興味・関心を、わたしは人間の営みを見つめつつ、それにコミットしつつ、強く感じている。

臨床教育学は、人間の歴史に例えれば、現在小学校時代を生きているところであろうか。明確な自己主張はできるものの、まだ学問としての一貫したスタイルは確立されていない。今後も、多くの他の学問領域との接触を試みながら、能動的な展開を目指していきたい。

さて、本紀要もはやいもので、第6号を迎えることになった。本紀要は、これまで述べて

きたような試みの成果を、毎年世に問うてきている。この意味では、今年の本講座にとってひとつの節目の年であると、わたしは思っている。過去5年間というときのなかで熟成されてきた「知」を明確に提示する段階を迎えていると考えるからである。

本紀要を契機にして、他の学問領域との接触が生まれ、臨床教育学がさらに発展していくことを祈ってやまない。